令和6年度　岩手大学教育学部附属中学校　道徳科研究主題（第16期研究1年次）

新たな価値を創造し、皆がよりよく生きる社会づくりをリードする生徒の育成

〇鈴木　駿、金　祐輝、工藤　卓大、佐藤　陽

1　研究主題設定の理由

OECD Education2030 では、「私たちには、全ての学習者が、一人の人間として全人的に成長し、その潜在能力を引き出し、個人、コミュニティ、そして地球のウェルビーイングの上に築かれる、私たちの未来の形成に携わっていくことができるように支えていく責務がある。」と述べられている。未来を担っていく若い世代に対し、視野を広くもち、しなやかに、たくましく世の中を生きていく生徒を育成していく必要がある。

2　道徳科における目指す生徒の姿

〇道徳的知識を正しく理解し、道徳的価値の理解に役立てている姿	〇多様な視点から道徳的価値を応用したり、批判的に物事を捉えたりできる姿 〇相手や社会の視点に立って問題を考えたり、自分の状況をメタ的に捉えたりできる姿	〇道徳的な問題を発見し、解決しようとする姿 〇他者の意見を受け入れ、新たな価値を創造しようと協働する姿 〇正しさや善を志向しようとする姿

道徳科では、「育成を目指す資質・能力」ではなく、「道徳科における目指す生徒の姿」とした。道徳の授業において、上記した生徒の姿が見られるよう育成を目指す。

まず、生徒が道徳的価値の理解をするための、その価値の周辺にある知識などを理解させたい。例えば、【(11)公正、公平、社会正義】について考えるとき、公正と公平の違いについて理解していなければ、「公平とは？」という問いに対して正しく思考し、自分の中での答えにたどり着けないことが予想される。そのほかにも、尊厳死や安楽死の違いなど、内容項目そのものの言葉の理解だけでなく、取り扱う事象に対する正しい理解が必要である。

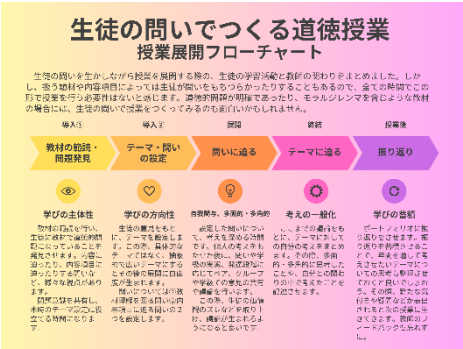
また、授業の中で多様な他者との関わりの中で物事を多面的・多角的に考えることはもちろんのこと、道徳科の授業での学びにとどまらない視野をもたせるように授業づくりを行う。また、人間の道徳性は身近な人間関係の視点を得たり、社会集団、全世界の視点を得たりしていくことによって発達していくものと考えられている。教材を読み、登場人物の心情を考えさせることにとどまらず、視野を広げて生徒に思考を促していきたい。

さらに、学びに向かう姿として、教材や資料の中における道徳的諸問題を生徒自身が発見し、解決に向かおうとする心情を育んでいきたい。教師側から与えられる問いだけではなく、自分自身の経験や課題意識に基づいて解決したい問いを見いだすことは、生徒が主体の道徳教室をつくる一つの要素になる。問いを見いだす能力を生徒に身につけさせるため、例えば「この作品では何が問題になっていますか？」「自分の中で深めたい疑問はありますか？」と問いかけながら、生徒が主体的に関わる授業を展開したい。

3　研究内容

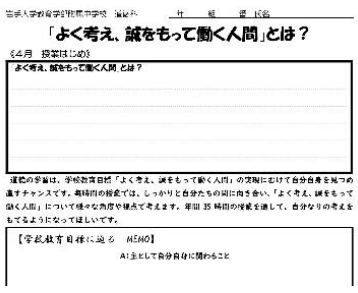
視点①　個別最適な学びと協働的な学び

生徒一人一人の道徳性の発達には大きな違いがあり、道徳的諸問題に対して生徒によって問いや解決したい問題が異なってくる。しかし、道徳の授業では教師が設定したテーマに沿って授業が展開されることが多く、それが生徒にとって「押しつけ感のある授業」となってしまったり、教師の「道徳授業に対する苦手意識」につながったりしている。生徒が資料を読んだり、見たりする中で見つけた道徳的諸問題を引き出し、生徒のエージェンシー（当事者性、主役性）を発揮させることによって、授業が活発になり、物事に責任感をもって取り組んだり方向性を設定したりする力などが育成されると考える。そのため、教師は「資料の中で、何が問題になっていますか？」と問いかけ、生徒と対話的に授業を展開していく。生徒の問いに基づいたテーマ設定や発問の設定を行うことで、生徒の学習の必要感が生まれ、思考が活発になることが予想される。これこそが、多面的、多角的に考え、議論する道徳の授業の実現につながっていく。



視点②　教科等横断的資質・能力の育成

学校における道徳教育は、道徳科を要として教育活動全体を通じて行うものであることから、各教科や総合的な学習の時間や特別活動などの時間においても行われるものである。生徒が生きる今やこれからの社会は、息苦しさを抱えながら生活する人間が昨今増えたり、SNS での個人宛の誹謗中傷が社会的な問題になったりするなど、ICT の発達によって開けた社会に逆行するような、閉塞感を感じずにはいられない社会である。学校で学ぶ様々な知識や考え方、体験が、生徒個人の生き方や社会生活をより善いものにするために活用されることが望ましく、それを根底で支えるべきなのが道徳科の授業である。授業で考えたことが生活の中の様々な事象に応用され、望ましい行為につながるような「日常に生きる」道徳的な資質・能力を育成する必要がある。（過去に学べば、ノーベルが発明したダイナマイトや、ライト兄弟が発明した有人飛行機が本人たちの当初の思いとは異なり戦争に活用されてしまったりすることもある）。そのため、授業内や学期末に生徒自身が生き方を考える上で重要だと思ったことを個人で深める時間を保証する。生徒自身の問題意識が、その思考の過程で一般化され、日常に転用できるような道徳的知識や心情になることをねらいとして行うものである。

視点③　評価の充実

生徒自身が道徳の学びを振り返られるように、振り返りシートを充実させていく。年間を通して貫くテーマを学校教育目標「よく考え、誠をもって働く人間」に近づくために、という視点で振り返りをさせる。前期と後期で1度ずつ最も印象に残った授業を振り返らせる時間を設け、自分自身の考えを深めさせる。年間を通して振り返りを蓄積していくことで、生徒自身の学びや、生徒同士の学び、あるいは教師による指導と評価の一体化のための重要な学びのログになっていく。